日本語学習者によるフィラー誤用に対する意識化の効果[1]

ムートンジスラン

1. はじめに

話し手が「つなぎ」として発話中に挿入するフィラー（filler）は、一見無意味に見えるものの、適切な使い分けが存在し、話し手の心理状態を映し出す機能も持つ。近年の研究により、これらの形式が様々な機能を持っていることが明らかになりつつある[i]。日本語母語話者（以下、母語話者）が、無意識的であれ意識的であれ、フィラーを用いて円滑なコミュニケーションを実現しているのに対し、日本語学習者（以下、学習者）はその存在にすら気づいていないことが多い。学習者が母語話者の談話スタイルを模倣する過程で、誤った解釈に基づき、ある特定のフィラーを覚え、誤用を多発してしまうケースも多く見られる。

具体的に、知らない人に道を尋ねる場合における、母語話者と学習者の発話の事例をあげると以下の通りである。

（1）[知らない人に道を聞く場合]（母語話者）

「***あのー***　すいません。ちょっと訪ねたいんですけど。この辺に、郵便局あるって聞いたんですけど、ちょっとどこか教えてもらえませんか？」

（2）[知らない人に道を聞く場合]（学習者）

「あのー　すいません、なんか　道聞いてみたいんですが、なんか　郵便局はどこにあるか聞いてもらえますか？教えてもらえますか？」

(1) では「あのー」が自然に使用されているのに対し、(2) の「なんか」は不自然である。本稿では上記（2）のような、学習者が誤用する不自然なフィラーを「誤用フィラー」と呼ぶ。このような誤用は発話目的達成の障害にはなりにくいため、学習者自身では気づきにくく、他者から注意されることもほぼない。また教科書等でも意識的に取り上げられることは少ない[ii]。

2. フィラーの種類と機能

本研究では、日本語教育の歴史における代表的な教材として挙げられる『日本語初歩』(1986)、『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』(1998）と、日本語の運用力強化に重点を置いた教科書として注目を浴びている『J BRIDGE VOL1･VOL2』(2008）に登場する 5 つのフィラー「あのー」「えーと」「うーん」「まー」「さー」に加え、筆者が日本語を教えた経験と観察により学習者が誤用を多発する傾向が強いとされた「なんか」を取り上げる。

---

[1] 本稿は、2010 年日本語教育学会春季大会の口頭発表に基づいており、要約は同大会の予稿集に掲載されている。

2.1「あのー」と「えーと」[iii]

「あのー」は、発話形式に気を配っているという話し手の態度を表出し、結果として発話の「失礼さを減らす」ことが出来る。定延（2005）と定延・田窪（1995）の「心的操作モニター」[iv]理論によると、「あのー」は「話し方の検討に手間取っていること」を聞き手に理解してもらえるように、「えーと」は「話すべきこと自体の検討・計算に手間取っていること」を聞き手に伝えようとして出現する談話標識である。

2.2「まー」

富樫（2002）は、「まー」類を、話し手が「心内で行うデータの処理過程の曖昧性を標示する」言語形式であると述べており、本研究ではこの説明に則って学習者の指導を行う[v]。また、曖昧性という本質的機能からの語用論的な派生により、「まー」発話は聞き手の感情を和らげる効果[vi]を持つ場合もある。

2.3「さー」

森山・張（2002）は、与えられた疑問文に対して回答に用いられる「さー」は、探索・編集中を意味するのではなく、回答を要求された状況なのに答える意志がない[vii]という標示として使えると指摘する。さらに定延（2005）は、「さー」を「あからさまに儀礼的なフィラー」と呼び、「道を聞かれたが答えが分からない場合、いきなり『わかりません』と言わず、まず『さー』などと言って『ダメもとで考えてみる』というふりをするのも、丁寧さの一つの表し方である」と説明する。

2.4「うーん」

「うーん」の機能に関しては、応答要求に対して応答留保という「態度表明系統」の機能を担っていることが示唆されている（森山，1989）。つまり、応答要求に対して話し手は「うーん」を出現させることにより、聞き手に「現在表現探索中」であることを標示する一方で、ただ沈黙を回避しているだけでなく、「まだ自分が発話権を握っている」という合図を聞き手に送ることができる。

2.5「なんか」

次の言葉を思い出せない場合、また次の発話までに時間を要する場合にフィラーの連続が時間稼ぎに使用されることがある。これについて山根（2002）は、「なんか」に「何か」という元の意味のニュアンスが残っているため、他のフィラーに比べ、身近な人と言葉を交わす時、思案中であることを聞き手に伝えやすいと示唆している。[viii]

3. 研究目的

外国語学習における意識化の重要性について Schmidt (1990) は「Noticing Hypothesis」を唱え、第二言語学習者が新しい言語形式をアウトプットできるようになるには、インプットの時点で、その言語形式自体に対する気づきが必要であることを指摘している。この仮説に基づけば、「目標言語の一

つの言語形式と学習者がアウトプットする言語形式の間に相違点があることに、学習者自身が気づき・意識すれば、それだけでその言語形式の習得が可能になる」ことが示唆される。本研究はこのSchmidt の理論に基づき、母語話者と学習者の談話で無意識に用いられているフィラーに焦点を当て、フィラー誤用を学習者本人に気づかせ、さらに明示的にその機能を指導することにより、フィラー誤用が修正できる現象であることを検証することを目的とする。

4. 研究の概要

4.1 参加者

参加者は、琉球大学留学生センターの中級日本語クラスに在籍する9名（男性3名、女性6名）である。来日前の日本語学習歴は半年から3年間、国籍はタイ（1）、台湾（2）、韓国（2）、イギリス（1）、米国（1）、中国（2）である。このクラスは初級文法を習得し中級へと移行する時期であり、フィラーのような意識しにくい言語形式が定着するのに、適切な学習期であると考えられる。日本人大学生13名（男性5名、女性8名）にも比較データ収集に参加してもらった。調査前にはフィラーに関する情報は伏せ、「留学生との交流」に関する研究であると説明した。

4.2 実験資料

表1のように4場面のロールプレイを設定した。場面①では、「ダメもとで考えてみる」ふりをする（定延，2005）ため、「さー」の出現が予測できる。場面②の留守番電話という設定では、限られた時間内での負荷の高い心内言語処理が要求されるため、「話すべきこと自体の検討・計算に手間取っていること」を標示する「えーと」の出現が予測できる[ix]。相手との約束をキャンセルするという申し訳なさから「あのー」を使用することも考えられる。また聞き手は友人であり、思案中であることを容易に伝える「なんか」の使用もあり得る。場面③では、見知らぬ人に対して話の切り出し方が分からない場合に相応しい「あのー」の使用が期待される。「あのー」の使用により、発話の丁寧度が高まる。場面④では、場面②と同様「えーと」の出現が予測できるが、聞き手は友達ではなく上司である。そのため一層の「聞き手への配慮」が要求されると考えられ、発話の失礼さを減らす「あのー」出現も予測できる。「なんか」は上司に対する発話中の使用は好ましくない。

表1：調査に使用した4つのロールプレイ場面と期待されるフィラーの使用

	場　面	フィラー
①	知らない人に道が聞かれてわからないとき、何と答えるか。	さー
②	友人との約束をキャンセルするため、留守番電話にメッセージを残す。	えーと・あのー・なんか
③	郵便局への道が分からないので、知らない人に道を尋ねる。	あのー
④	突然仕事を休まなければならなくなり、上司の留守番電話にメッセージを残す	えーと・あのー

4.3 手続きおよび記録方法

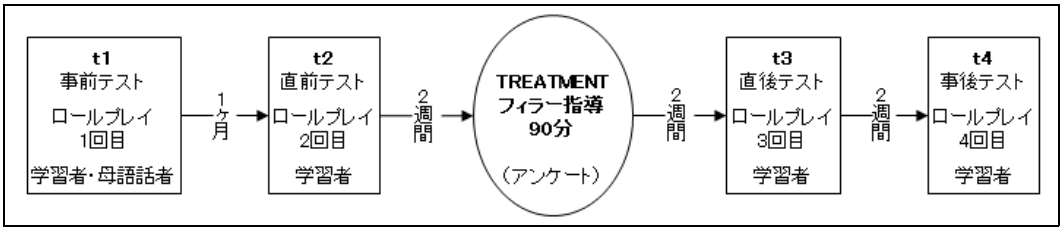

図１：研究全体の計画

図１に研究の全体像を示す。t1 では、学習者と母語話者のロールプレイを録画し、その結果を元に先行研究にみられるフィラーの機能の定義の採用と再定義を行なった。t2 では学習者のロールプレイを再度録画し、t1 のデータと比較した。treatment では 90 分のフィラー指導を行った。t1 と t2 の学習者の発話を逐語記録化､分析し､母語話者のデータと比較しつつ､フィラーとその誤用を指導し、気づきを促した。指導後さらに、t3 と t4 として学習者のロールプレイを録画、逐語記録化し、分析を行った。

ロールプレイの際は、被験者に場面と役割の説明が書かれたロールプレイカードを読ませ、口頭で答えてもらった。「知らない人」の役が必要な場面①と③では筆者がその役を演じ、全体で 3 ～ 5 分のデータを収集した。研究室や教室に一台のビデオカメラを設置し、学習者一人のみが画面に映っている状態で録画を行なった。

フィラー指導後、学習者にアンケートを実施し、いくつかの要因に関する情報を集めた。情報は年齢、性別、国籍、学習歴、動機づけ、日本でのアルバイト・仕事の経験、母語話者との接触、母語話者の恋人である女性または男性の存在などについてであった。

5. 結果

各場面で見られたフィラー数（参加者総出現数）は表 2 の通りである。例えば場面①の母語話者のデータに観察された全 9 フィラーのうち「あのー」が 2 回であった場合、2/9 のように示す。

表２： ロールプレイ場面でのフィラー使用の頻度

	場面①						場面②					
	あのー	えーと	うーん	まー	なんか	さー	あのー	えーと	うーん	まー	なんか	さー
母語話者	2/9	4/9	2/9	0/9	1/9	0/9	6/9	2/9	0/9	0/9	1/9	0/9
学習者 t1	4/5	0/5	0/5	0/5	1/5	0/5	5/10	1/10	0/10	1/10	3/10	0/10
学習者 t2	3/8	3/8	1/8	1/8	0/8	0/8	8/18	3/18	2/18	0/18	5/18	0/18
学習者 t3	5/8	0/8	1/8	0/8	1/8	1/8	6/9	2/9	0/9	0/9	1/9	0/9
学習者 t4	5/8	1/8	0/8	1/8	0/8	1/8	7/9	2/9	0/9	0/9	0/9	0/9

	場面③						場面④					
	あのー	えーと	うーん	まー	なんか	さー	あのー	えーと	うーん	まー	なんか	さー
母語話者	11/15	4/15	0/15	0/15	0/15	0/15	11/25	14/25	0/25	0/25	0/25	0/25
学習者 t1	8/11	1/11	0/11	0/11	2/11	0/11	8/14	1/14	0/14	3/14	2/14	0/14
学習者 t2	11/14	1/14	0/14	0/14	2/14	0/14	5/9	2/9	0/9	0/9	2/9	0/9
学習者 t3	11/15	4/15	0/15	0/15	0/15	0/15	8/9	1/9	0/9	0/9	0/9	0/9
学習者 t4	12/15	2/15	1/15	0/15	0/15	0/15	8/11	2/11	1/11	0/11	0/11	0/11

5.1　場面①（道を尋ねられたが分からない場合）

図 2 はロールプレイの場面①におけるフィラーの出現頻度をパーセントで表したものである。

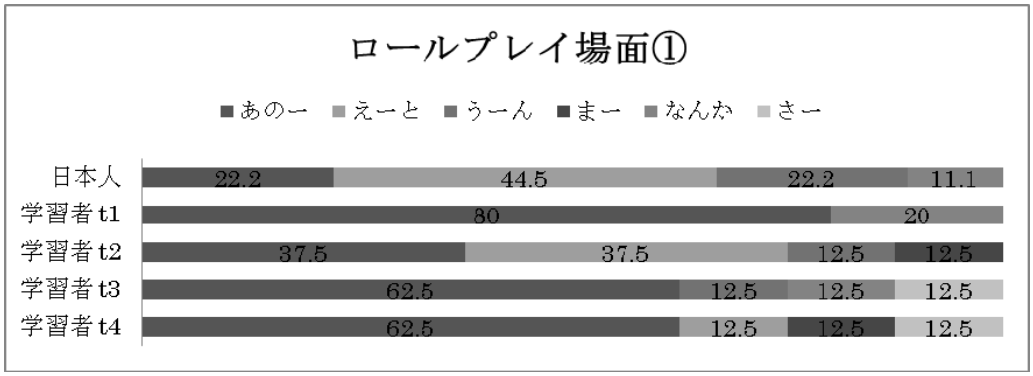

図２：ロールプレイ場面①でのフィラー使用結果

場面①において母語話者は、「えーと」を最も多く使用（44.5%，全 9 例のうち 4 例、以下「4/9」のように示す）し、「あのー」と「うーん」も使用している。一方、学習者の使用では最初（t1）「あのー」の多用が顕著であった（80%，4/5）。1 ヵ月後の t2 では、学習者の「えーと」と「あのー」を同様に使用する（双方とも 37.5%，3/8) という新しい傾向が観察できた。また使用するフィラーの種類も増えている。この t2 では母語話者が多用する「えーと」を、学習者も多少使用するようになったため、より母語話者データに近づいたといえる。

しかし、「フィラー指導」直後の 3 回目の場面①のデータを表す t3 では、「えーと」の使用が 0%（0/8）に減少し、t1 で見られた「あのー」を多用する傾向に戻ってしまった（62.5% , 5/8)。さらに、場面①で予測されていた「さー」出現は t3 で初めて学習者のデータに現れたが、その出現率はわずか 12.5% (1/8) であり、予測とは大きくずれてしまった（Cf. 表 1 ）。ただしこの「さー」の使用は日本人母語話者のデータにも出現せず、先行研究の文献結果とは異なっていた。最後に、「フィラー指導」1 カ月後の t4 でも t3 と同様に、学習者は「あのー」を多用する傾向が目立っていた（62.5%，5/8)。

5.2　場面②（友達に留守電メッセージ）の結果

図 3 はロールプレイの場面②におけるフィラーの種類と出現頻度をパーセントで表したものである。

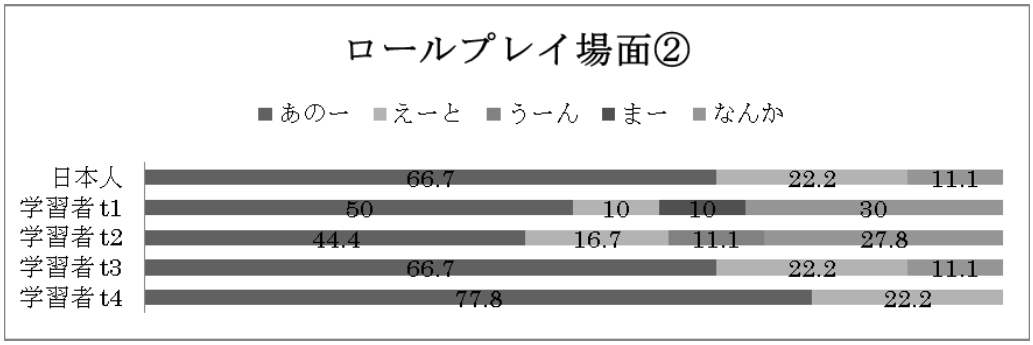

図３：ロールプレイ場面②でのフィラー使用結果

約束のキャンセルを友人の留守電に入れる場面②においては「えーと」と「あのー」の使用が期待されていたが、母語話者のデータから「あのー」がよく使用され（66.7%，6/9)、「えーと」の使用は低い（22.2%, 2/9) というパターンが観察できた。「なんか」の使用は「えーと」の使用よりも低かった（11.1%，1/9)。学習者では t1 において、「あのー」を多用する（50%，5/10)）が、「なんか」も使用する（30%，3/10)」という特有の傾向が見られた。t2 でも t1 と同じ傾向が観察され、数値的には母語話者より減るものの「あのー」の多用と（44.4%, 8/18)、「なんか」の使用（27.8%, 5/18）があり、t1 と t2 で学習者の使用傾向は変わらなかったといえる。しかし、「フィラー指導」直後の t3 においては偶然にも、母語話者とまったく同じ比率の使用が観察され、「なんか」の使用も母語話者並みの 11.1%（1/9）に抑えられた。最後の t4 では、「なんか」の使用は学習者のデータから消え、母語話者に比べ、より強い「「あのー」の多用と（77.8%，7/9）と「えーと」をあまり使用しない（22.2%，2/9）パターンが観察できた。

5.3　場面③（他人に道を聞く）の結果

図 4 はロールプレイの場面③におけるフィラーの種類と出現頻度を、パーセントで表したものである。

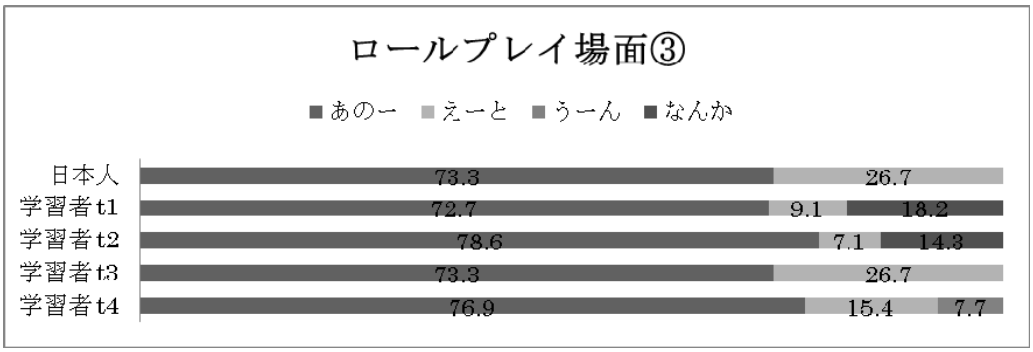

図４：ロールプレイ場面③でのフィラー使用結果

予測どおり母語話者は「あのー」を多用したが（73.3%，11/15)、「えーと」の使用も若干見られた(26.7%, 4/15)。学習者のデータでも日本人と同様に、「あのー」の多用が t1 で明らかだったが(72.7%,

8/11)、母語話者に見られない「なんか」の使用（18.2%，2/11) が観察された。続く t2 でも「なんか」の使用が 14.3% (2/14) 見られ、学習者特有の誤用だと思われた。しかし「フィラー指導」直後の t3 では、「なんか」の使用が皆無となり、母語話者と全く同じパターンであった。ただし最後の t4 では新たに、「うーん」を 1 回使った学習者が一人出現した。しかしそれを除けば、学習者のパターンは母語話者のものに十分似ていたといえる。

5.4　場面④（上司に留守電メッセージ）の結果

図 5 はロールプレイの場面④におけるフィラーの種類と出現頻度を、パーセントで表したものである。

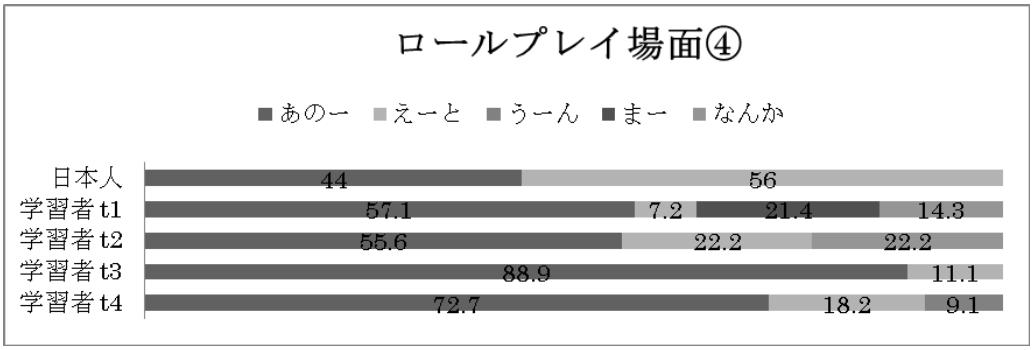

図 5 ：ロールプレイ場面④でのフィラー使用結果

このロールプレイにおいて、母語話者のフィラー使用は「えーと」（56%, 14/25）と「あのー」（46%, 11/25）に大きく二分され、「あのー」の多用が目立った場面②（図 3 参照）とは異なる使用パターンが明らかになった。つまり上司への留守電メッセージでは話し手は、より何を言おうか、伝えるべき内容を検索ながら発話しようとしている心理状態にあると言えよう。このような母語話者のデータに対し、t1 の学習者は「あのー」を多用しており（57.1%, 8/14)、「えーと」の使用は 7.2% (1/14）に留まっている。また「まー」（21.4%，3/14) と「なんか」（14.3%，2/14）の出現については、頻度は低かったものの、母語話者のデータには見られず、学習者に特有の使用傾向だといえよう。t2 においては、「あのー」の多用（55.6%，5/9）は変化していないものの、「まー」の使用がなくなり、「なんか」の出現率（22.2%，2/9）が相対的に上昇した。「フィラー指導」直後の t3 では、学習者による「あのー」の多用が急激に上昇した (88.9%, 8/9)。1 ヵ月後の t4 においても、頻度は多少下がったものの、「あのー」の多用は顕著であった（72.7%，8/11)。「えーと」の使用については 18.2% (2/11) とやや比率が上昇したが、「あのー」より「えーと」の使用頻度が高めだった母語話者のパターンには、至らなかった。

6.　全体考察及び結論

本稿ではフィラーの機能に関する先行研究を元に、４つのロールプレイ場面を設定し、それぞれにおいて出現しそうなフィラーの予測を立てた（4.2 実験資料および表 1 参照)。然るに母語話者のデータがその予測を裏付けることができたかというと、そうとばかりも言えず、新しい発見があった。例

えば「道をたずねられたが答えを知らない」場面①において、先行研究を元に「さー、ちょっとわかりません。」というような「さー」の使用を期待したのだが、実際には出現しなかった。母語話者の実際のストラテジーを見ると、「えーと」を使うパターンが最も多かった（44.5%，4/9）。母語話者は答えを知らない場合、とにかく何を言ったらいいのかが分からないため、「えーと」を使うことで無意識に時間を稼ごうとするのだと考えられる。場面②～④においては、母語話者の発話に出現するフィラーの種類については、ほぼ予測どおりになったが、その割合について、今回のデータは示唆に富んだものだった。例えば「あのー」の使用が典型と思われる場面③においても、「あのー」の他に「えーと」の使用が見られたり、相手との上下関係が異なる場面②と④では、「えーと」と「あのー」の出現率に差が見られたりした。

「フィラー指導」の効果に関しては、4 つの場面で差が見られた。場面①では指導がなかったにも関わらず、t2 では t1 より母語話者の使用法に近い「えーと」と「あのー」を同様に使用する傾向になっていた。しかし指導後の t3 と t4 では、「あのー」を多用し過ぎる学習者独特の傾向に戻ってしまった。場面②では、フィラー指導前は、母語話者のデータには出現の少ない「なんか」の使用が学習者に多く見られたが、指導後はその傾向が抑えられ、より適切な「あのー」と「えーと」の使用が見られた。さらに場面③でも、母語話者のデータには出現しない「なんか」の使用が学習者に見られたが、指導後は「なんか」の使用がなくなり、より適切な「あのー」と「えーと」の使用が見られた。ただし場面④では「えーと」の使用がまだ母語話者に比べ少なく、「あのー」の圧倒的な多用が、指導後に助長される結果となってしまった。

以上から今回のフィラー指導が「大変効果的であった」という強い結論は、導くことができなかったが、その理由としてフィラーの使い分けに関する「機能差の理解」が難しいことが挙げられる。日本語教育のテキストで取り上げられているフィラーが限られている中で、今回は 6 つのフィラーを紹介し、その機能の違いについて講義を行なったため、その使い分けについて混乱が生じた可能性がある。元々無意識に使用されている談話標識であるフィラーを意識的に 6 つの中から選択し、使い分けることはそれほど簡単ではないのかもしれない。全データに目を通した結果、全データの 4.5%（25/553）を占めている「まー」、6.8%（38/553）を占めている「うーん」と 0.3%（2/553）を占めている「さー」使用 に関して、特に目立った傾向が見られず、これらを使用する場面がなかったことも混乱の原因になった可能性がある。

また今回の学習者データで目立ったのが「あのー」の多用である。その理由の一つとしては、学習者が聞き慣れている指示詞の「あの」からフィラー「あのー」への派生があるのではないだろうか。日本語を外国語として学習する（JFL）環境の学習者は、母語話者と言葉を交わす機会が少ないため、フィラーの存在自体に気づく機会が極めて少ない。文型や助詞などの用法と異なり、フィラーは教科書で明示的に指導される項目にはなっていない。したがって、来日し第 2 言語としての日本語（JSL）環境に入った学習者は、日本人の発話の中で、今まで教科書で学習してきた指示詞「あの」に類似している「あのー」に耳を傾ける可能性がある。そして、初めて注意を向けたフィラー「あのー」が癖

として定着してしまい、その後時間が経っても、学習者は「会話中に言葉に詰まったらまずは「あのー」を使ってみる」というストラテジーを用い、「あのー」を普遍的なフィラーとして誤用してしまったと考えられる。インタビュー調査を行い、この派生を明らかにすることを今後の課題としたい。

このようにロールプレイ場面でのフィラー使用について、指導により学習者が直ちに正しい使い分けを習得するという結果は確認できなかったが、参加者へのアンケート結果からは、このようなフィラー指導を有益だとする感想が多く得られた。「フィラーということばを初めて聞いたし、まさか自分がこんなに無意識に使っていると思ってなかったので、びっくりしました。」というコメントがほとんど全員のアンケート回答に見られた。また、「それぞれのフィラーにそんなに詳細な機能が付いているとは知りませんでした。指導の時のフィラーの機能における説明がよかった。」という感想もあった。フィラー指導が完璧に効果的でなくても、学習者の好奇心を喚起させたことは間違いない。

さらに、参加者の中で日本語能力が一番優れていた学習者が「フィラーの存在には気づいていたのですが、それぞれに機能がついていることは知りませんでした。フィラーを使うのは失礼だと思っていたため、敢えて使わないようにしています。」と指摘していたことも興味深い。気づき（Noticing）におけるレベルがあるといえるのではなかろうか。あるフィラーの存在に気づいていても、その機能と使い分けの理解に不安があれば、学習者は回避ストラテジーを使うという典型例である。フィラーの種類と機能を理解することは、語用論的知識が要求されている日常生活の日本語会話のニュアンスを徹底的に理解することに大きく寄与するといえる。場面③における「なんか」のように、不適切なフィラーを使えば失礼に思われるときもある（後述の例参照）が、それと対照的に、場面③でどう話を切り出した方がいいのかが分からない場合に「あのー」を使うことで、発話の丁寧度が高まり、より好感を持たれることもあるからである。したがって、フィラーの存在に対する気づきのみならず、フィラーの機能とフィラーにおける語用論的な使用のルールが理解できていなければ、学習者は会話の相手に間違った印象を与える可能性は残るのである。そのため、学習者の日本語能力レベルを問わず、フィラー指導は学習者にとって有益だと主張したい。例えば、以下の「なんか」の使用が減少した例を見てほしい。

場面③：韓国出身の学習者（男性）の変化例

t1：「あのー　すみません　あー　<u>なんか</u>　私が郵便局に行きたいんですが、どうすれば、い、行けますか？」

t2：「あのー　すいません、<u>なんか</u>　道聞いてみたいんですが、<u>なんか</u>　郵便局はどこにあるか聞いてもらえますか？教えてもらえますか？」

t3:「あのー、すみません。ちょっと、あー、…　道がわからなくて、ちょっと、きーいたいんですが、えー、今郵便局を探していますけど、どこにあるかわかりますか？」

t4：「あのー、すいません。えーと、郵便局を探していますが、どこか教えてもらえますか？」

指導後の t3, t4 では「なんか」の使用がなくなり、t4 では「えーと」を用いつつ、発話全体がより自然な印象を与えていることがわかる。

このような変化はフィラー指導後に、毎日の生活で出会う日本人のフィラー使用により注意を払い、その使用を習得しようとする意識の変化によってもたらされるのではないだろうか。指導前、母語話者の真似をしすぎて、「なんか」を多発してしまっていた今回の調査に参加した一人の台湾人学習者がいたのだが、フィラー指導の際に指摘されたことをきっかけに、それからの日常生活の中に現れる「なんか」に注意を払うようになっていたことが、実験後の筆者との普段の会話で、より適切な「なんか」の使用が観察されたことからも見て取れる。

また、別の参加者である韓国人学習者については、指導前、全然気にせずに「まー」や「なんか」などを多用していたのだが、指導後は、指導中に気づかされたことのせいか、一つ一つの単語、表現、使用するフィラーに気を配りすぎた時期があり、不自然な日本語で会話をしていたときがあった。ところがフィラー指導の 3 ヶ月後、偶然に出会った彼が「昨日、道を歩いていたら他人に道を聞かれたのですよ！」と嬉しそうに説明してくれた。無事に答えができて、その時に、迷わずことばが出てきたため、フィラー指導を受けてよかったと伝えてくれたことは大変印象深い出来事であった。

今回の参加者のアンケート結果からも示されたように、外国語学習者が「話せるようになりたい」という強い希望を持つのは、日本語教育でも同じである。もしフィラーを意識し、適切に使うことができれば、話している間の準備時間の確保に加え、発話をよりスムーズに、自然に聞こえるものにすることができるだろう。本研究は参加者数の少ない探索的研究ではあったが、学習者がフィラーの存在に気づき、指導を受けることで、どのように使用が変化するかを調べることにより、指導の必要性と効果が明らかになった。今後より効果の高い指導の構築のために、さらなる研究が望まれる。

参考文献

飯尾牧子（2006）「短大生の話し言葉にみる談話標識「なんか」の一考察」『東洋女子短期大学紀要』38、東洋女子短期大学.

定延利之・田窪行則（1995）「談話における心的操作モニター機構－心的操作標識『ええと』と『あの（一）』－」『言語教育』第 108 号，日本言語学会.

定延利之（2005）『ささやく恋人、りきむレポーター』岩波書店.

富樫純一（2002）「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』第 7 号.

メイナード・K・泉子（1997a）『談話分析の可能性：理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版 .

森山卓郎（1989）「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1，大阪大学文学部日本学科.

森山卓郎・張敬茹（2002）「動作発動の感動詞「さあ」「それ」をめぐって－日中対照的観点を含めて－」『日本語文法』2 巻 2 号，くろしお出版.

山根知恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版.

Maynard, Senko K. 1997b. *Japanese Communication: Language and Thought in context,* University of Hawaii

Press.
Schmidt, Richard W. 1990.“The role of consciousness in second language learning” *Applied Linguistics,* 11/2, 129-158.
国際交流基金日本語国際センター（1985）『日本語初歩』凡人社 .
田中よね・牧野昭子・重川明美・御子神慶子・古賀千世子・石井千（1998）『みんなの日本語初級 1・2 本冊』スリーエーネットワーク .
小山悟（2008）『ジェイ・ブリッジ for Beginners Vol.1-Vol.2』凡人社 .

---

[i] 定延・田窪（1995）、山根（2002）、富樫（2002）、定延（2005）などを参照。本稿では、定延・田窪（1995）を踏まえて、感動詞・間投詞・応答詞の類を「談話標識」と呼称し、「談話標識」の基本的な意味は、定延・田窪（1995）で指摘された「心的操作モニター」とほぼ同じである。ただし、本稿では、無自覚でも出現しうる「談話標識」類の中に、無意識に現れる「フィラー」が含まれていることを主張したい。

[ii] 『日本語初歩』（1985）では、全 34 課を分析した結果、現れた回数は、「さー」は 3 回、「まー」は 1 回という結果だった。『みんなの日本語 I と II』（1998）では、全 50 課を分析した結果、「あのー」は 17 回、「えーと」は 5 回、「うーん」は 3 回、「さー」は 4 回現れたことが観察できた。『ジェイ・ブリッジ for BeginnersVol.1-Vol.2』（2008）では、全 42 課を分析した結果、「あのー」は 5 回、「えーと」は 8 回、「まー」は 10 回、「うーん」は 19 回、「さー」は 3 回現れたことが観察できた。しかしその機能の違いに関する説明は載っていなかった。

[iii] 定延・田窪（1995）によると、長音の使用／不使用と韻律要素は異なるが、基本形態は同一であるため、本稿では、「あのー」類とは、「あの」と「あのー」を併せて表したものとする。また、「えーと」においても、「ええと」、「ええっと」、「ええとおー」、「えーとですね」、「ええとね」などを「えーと」類とする。「まー」類、「なんか」類、「うーん」類、「さー」類も同一。

[iv] 心的操作に関しては、定延・田窪（1995）を参照。心的操作に関わる表現は、話し手自身の行っている心的操作をモニターする標識や、聞き手との情報受け渡しに関する標識として機能し、音声対話におけるヒト対ヒトの認知インターフェイスとして重要な役割を果たすといえる。

[v] (6)1980 円に消費税だから、***まあ***、2100 円くらいかな。

(7) ？？　1980 円に消費税だから、まあ、2079 円だな。

何らかの処理 (考え) の結果、正確な情報が出力されたという状況の場合は、「まあ」は現れることができない (7) という。（富樫 2002）

[vi] 「曖昧性→曖昧な物言い→はっきりと表現しない→やわらかな物言い」富樫（2002）を参照。

[vii] (19)「さあ、わかりませんねえ。何せ、おおぜいの人ですから。」（太宰治『津軽』）（森山・張 2002）

[viii] 特に、身近な人と言葉を交わす際に、友だち同士で、よく出現する理由の一つは、「なんかわからないけど … あんたわかるでしょう！？」のような、話し手と聞き手のお互いの距離が近いため、「お互いのことを分かり合う」機能を果たしているからであると考えられる。したがって、話し手は「あなたの意見を重視しているよ」という潜在的な合図を聞き手に送り、「なんか」によって標示されている発話は「和らげる」効果を持つように感じられるのである。 たとえば、レストランで注文する場合は、「**えーと**　前菜何にしようかな。」は自然に聞こえるが、「なんか　前菜何にしようかな。」は不自然に聞こえてしまう。 店員に向かって、「なんか　前菜何にしようかで迷っているけど、私が何が頼みたいのかをあんたわかるでしょう！？」という態度をとるのが、注文という場面に相応しくないからである。（Maynard，1997a,1997b；山根，2002；飯尾，2006 を参照。）

[ix] 留守電場面に関して山根 (2002) は、「物理空間を共有しない談話では、非言語行動や引き込みに頼ることができない。そのため、次の発話の検索までにより時間を必要とすることとなり、エート型が出現しやすい環境であると言える。」と述べている。（山根 2002：231）

[x] ただし、特に「さー」に関しては、場面設定に問題はなかったことを主張したい。本稿では、2.3 で触れた「さー」の用法とは異なった母語話者の傾向が見られ、最終的に「さー」使用は母語話者データに現れなかったことが予想外であった。

Les effets d'une conscientisation vis-à-vis de l'utilisation erronée des fillers chez les apprenants de japonais

Ghislain MOUTON

Résumé

Au cours d'une conversation, les fillers peuvent être utilisés comme des liens, mais ils sont souvent considérés comme inutiles. Pourtant, il existe une façon précise et adaptée d'utiliser tel ou tel filler en fonction d'une situation donnée. On peut même dire qu'ils reflètent l'état d'esprit du locuteur qui les emploie.

Les locuteurs natifs de japonais les emploient inconsciemment et s'expriment de manière fluide et distincte. Les apprenants de japonais, au contraire, n'ont pour la plupart même pas remarquer la présence de ces fillers, mais les utilisent parfois néanmoins de manière abusive et erronée.

Nous proposons donc ici d'organiser une initiation explicite de l'utilisation des fillers, ayant pour objectif de faire prendre conscience de l'existence et du rôle de ces derniers dans la conversation, avec pour cible 9 apprenants de japonais de niveau intermédiaire. Pour cela, nous avons mis en place 4 situations de jeu de rôle requérant l'utilisation d'un filler en particulier. Nous avons effectué 4 interviews en l'espace de 3 mois, avec également la participation de 13 locuteurs natifs servant de points de comparaison quant à l'utilisation naturelle des fillers.

En comparant les résultats avant et après l'initiation aux fillers, nous avons vérifié que la fréquence d'utilisation de ces derniers chez les apprenants était plus proche de celle des natifs après l'initiation explicite.

Mots-clés: Fillers, Conscientisation, Marqueurs du discours, Initiation explicite